

日本的近代化と家の展開  
—先祖祭祀の変化を中心として—

○森本一彦（高野山大学）

日本の家については、さまざまな見解があるものの、前近代的な家と近代的な家の差異を認める必要がある。近代的な家は、典型的には家父長的家族として語られることもあり、明治民法によって制度的に確立したものであったと考えられてきた。明治以降の離婚率の低下は、近代的な家の確立を示しているとも言える。特に明治民法の施行による離婚率の急激な低下し、低下は終戦まで続いている。

一方、前近代的な家は、家産や家業を基盤とした「経営体としての家」や「生活保障としての家」など実態的なものとして評価されてきた。また幕藩体制において、家は権利と義務の主体である株として理解されることもある。家は一律に語られることもあるが、前近代においては地域差や時代差が大きかったことが指摘されている。

多様な前近代的な家が、画一的な近代的な家への時点で、どのように転換したのかが重要な課題であると言える。明治政府による戸籍制度や明治民法制定などの政策によって、近代的な家が形成されたと単純に言うてよいのであろうか。

本報告においては、「家族の標準化」は近世末に起こったとする説に関して先祖祭祀を中心として検討することとする。先祖祭祀を対象としたのは、日本の伝統家族である家の基礎的な構成要素であり、家の継続性を象徴する精神的な中核であると考えられてきたからである。家を継承すること、仏壇や位牌、墓を守ることが同義と考えられた。先祖祭祀には、家の系譜性や永続性が表現されている。さらに近代的な家は、前近代的な家の要件であった家産や家業を必要としなくなり、先祖祭祀の系譜性や永続性が満たされれば十分であると考えられた。前近代的な家と近代的な家の連続性を検討するには、先祖祭祀を指標にすることが有効性である。

日本の先祖祭祀の中核を担ってきたのは、菩提寺や檀那寺と呼ばれる仏教寺院である。仏教寺院が葬祭や先祖祭祀に積極的に関与するのは、江戸幕府のキリシタン取り締まりによる寺檀制度以降である。寺檀関係を記載するために作成された宗門改帳を見ると、近世前期から中期にかけて、夫婦や親子で檀那寺を異にする半檀家が多く見られるが、近世末には半檀家が減少して、家族全員が同じ檀那寺に統一された一家一寺となる。このような傾向は、まさに「家族の標準化」と呼ぶにふさわしい現象である。

ただし、半檀家はすべて同じではなく、嫁などの入家者が実家の檀那寺を継続する（持込み半檀家）と、嫁などの入家者が実家の檀那寺を入家先の家の檀那寺に変更する（家付き半檀家）に分類することができる。（持込み半檀家）は近世前期には見られたが、近世中後期に減少し、（家付き半檀家）に変化する。（家付き半檀家）は入家者の視点で見れば、一家一寺と同じ原理によるものであると言える。以上のことから、近世前期には入家者が先祖祭祀を持ち込むことによって複数の家の先祖を祭祀していたものが、一軒の家の先祖だけを祭祀するように変化したことが分かる。このような先祖祭祀の変化は、近代的な家の成立を示している。

我々の先祖祭祀の理解は、柳田國男『先祖の話』に影響を受けている。柳田の先祖観は、近代的な家に基づくものであり、前近代的な家は視野の外にある。柳田は1900年に帝国大学法科大学を卒業しているが、民法典論争で有名な穂積八束は1891年に「民法出デテ忠孝亡ブ」を発表し、1897年から1909年まで帝国大学法科大学長を務めている。柳田の先祖観の形成には、明治の知的エリート層の思想が影響しているであろう。また、国学者であった父の松岡操の影響、さらには近世末の国学の展開にも留意する必要がある。国学の近世的展開と「家族の標準化」の検討を試みる必要がある。

本報告では、「家の標準化」を先祖祭祀の展開を中心として検討するが、その背景にあった国学を中心としたイデオロギーの展開を視野に置く。

参考文献

森本一彦、2006、先祖祭祀と家の確立——「半檀家」から一家一寺へ

(キーワード：先祖祭祀、半檀家、日本的近代化)